
オモイノタネ 7

風紙文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オモイノタネ 7

【Nコード】

N2718P

【作者名】

風紙文

【あらすじ】

巷で噂の、思いを込めて育てると欲したものが出来上がる不思議な植物の種子『発明の種』
今までに記された話の少し前、少女が見た夢は、正夢の可能性を持っていた。

（前書き）

発明を回収する少女の、今まで話の少し前に見た夢
今回は、そんなお話。

……ここも、久しぶりだね。

「確かに、アタシとアンタの始まりの場所だからね」
帰って、きたんだね。

「ええ、アタシ達はやった。やりきったのよ」
後は……。

「何考えてるのよ。覚悟はしてたんでしょ？ だったら胸を張って
行きなさいよ」

ビーケ……うん。分かった。私、覚悟したから。

「そのいきよ、さあ、行きましょ」

……うん。

……ただいま。

「お帰りなさい、恵里」

お母さん……。

「お帰り、恵里」

お父さん……。

「そしてありがとう、全ての発明を回収してくれて」

「アタシがいたからこんなに早く終わったのよ」

……うん。ありがとう、ビーケ。

「ふん。別にお礼を言われる筋合いはないわ、アタシはナビゲータ
ー、案内するのが役目だからね」

それでも言わせて、どうもありがとう。

「……まあ、半分はアタシのおかげだし？ 一応、聞いておいてあ
げるわ」

うん。

「さて、恵里、父さん達は恵里が旅立った後、更なる研究を重ね、

そして、完成したんだ」

「何が完成したのよ？」

「発明を分解する発明を、分解する発明だよ」

「あのネジ回しの事ね？」

うん。見せてくれない？

「ああ……ほら、コレさ」

……コレが？

「なによ、ただの懐中時計じゃないの。アタシのセンサーにも反応しないし」

「それはそうだよ、コレは種の成分を分析、改良して作った。唯一の人工の発明だからね」

人工の発明……。

「名前は、そうだな……過去の発明使いタイマー、かな」

過去の発明使いタイマー……どんな能力なの？

「コレは過去に出会った事がある発明を思い浮かべると、それに变化するのさ、形から能力までね」

……そんな物を人工で？

「研究の成果さ」

……おめでとう、父さん。

「ありがとう、早速……」

……待って、父さん。

「なんだい？」

……ビーケと……。

「ああ、うん。いいよ」

……ありがとう。

……ビーケ。

「……アタシは言った筈よ。いずれ来る別れなんだから悲しむのはダメ、惜しむのもダメ、一思いにお願いってね」

うん。聞いたよ……。

「だったら」

……分かってる。分かってるけど……うう。

「ほら泣かないの、念願の夢が叶うのよ、もっとさ、喜ばないよ」

……う、うん……でも……。

「全く……アンタはアタシと両親の夢。どっちを取るのよ？ どっちも、はナシよ」

……私は。

「長年の夢だったんでしょ？ 叶える為に頑張ってきたんでしょ？
だったら努力を無駄にするんじゃないわよ」
ビーケ……。

「覚悟……したんでしょ？」

……うん。

「だったら、決まりよね」

……分かった。

……父さん。

「うん。はい、コレ」

ありがとう……。

「さあ、一思いにやって」

……うん。

「でも、最後に一つだけ……」

……何？

「アンタの気持ち……絶対に伝えなさいよ」

……うん。ビーケ……今まで……ありがとう。

「ええ、どういたしまして……そして、さよなら」

……さよなら。

「恵里……」

「……恵里」

お父さん。お母さん。私ね、この旅で気づいた事があるの。

「なんだい？」

人が発明するのは、人がそれを求めているから、人がそれを持っていけないからなの。

無い物を欲するのは、人として必ずある気持ち、だから皆は発明の種を手にして様々な物を発明していた。

それを、私は見て回っていてそれで気付いたの。

人の発明に、限界は無い。人が思い考えられるだけ、発明のアイデアは存在する。

「恵里……」

だからね、発明を完璧に消すことはできないの。このタイマーだって発明、これは残ってしまうでしょ？

だから父さん。完璧に拘らないで、完璧を得る事は、絶対できない。だから人は、発明をするんだよ。

「……分かったよ、この旅で、色々と学んだんだね」

うん。そうだよ、だから私に、いいアイデアがあるんだ。

「……っていう夢を見たの」

「夢ね……でも、それってさ」

「うん。多分……正夢に……」

「このマクラで見た夢は、本当になる。既に効果は実証済みのね」

「だから私は今、覚悟を決めるよ」

「確か、夢に出た覚悟ってやつね、もう既に現実になりかけてるじゃない」

「うん……だから私、いずれビーケと……」

「ほら、覚悟するんでしょ？ だったら泣かないの」

「……う、うん」

「それに、どれだけ先の話だと思ってるの？」

「うん……そうだね、だから、まだ覚悟しない」

「そう……まあ、まだいいわ、当分先の話だし」

「……それに」

「それに？……え？」

「ほら……こうやってマクラが無くなったら、今の正夢も無くなるかもしれない」

「……それで、いいのね？」

「もちろん。未来が決まっていたら、つまらないよ」

「そうね……じゃあ、そろそろ行きましようか？」

「うん……行こう」

発明の種

販売日から売り切れが続出し、更に多くの種が作られ、それもまた売り切れる。

更なる開発が進んだ際に、発明者が失敗に気づき、それ以降売られる事は無かった。

しかしその数は、万を優に越えていた。

それらを全て回収、分解するという、かなり果てのない旅に、彼女は望んでいたのだ。

全ては彼女が、自らの夢を叶える為に。

……ところで、アンタのいいアイデアってなんなのよ？

うん……実はね、ネジ回しを分解した後に、そのタイマーのデメリット。時間制限を過ぎると種に戻ってしまうというのがあってね、それを利用して、私がまた発明を作ったの。

それはね……

（後書き）

なんだか凄い最終回みたいな話ですが、まだまだ終わりません。
水野葉恵里とビーケのものがたりは、まだまだ続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2718p/>

オモイノタネ 7

2010年12月3日07時25分発行